



ほかの人のすぐれた文獻が多くあるなかで、拙い自著を臆面もなくひととまに紹介するのはあまりにも厚かましうとは思ふが、一人でも多くの人にお読みいただき、また、批評という人へのストローク（存在確認のやりとり）をもらいたいというわがままから、ここでは「か・く・ろ・ん」と「こ・こ・ろ」の二つの拙著を紹介させていただく。

まず、「か・く・ろ・ん」についてだが、日本教育新聞（九一年七月）ではつぎのように評論された。

「青少年教育とパソコン通信での第一人者として長い間社会教育の世界にいた著者が、昨年、大学の教員になりこの本を書いた。第一部では大学や社会教育での講義と学習、第二部ではパソコン・ネットワークと青年、第三部では子どもたちの団体活動」などについて説明している。これらはすべて著者が体験した中



メディア革命の時代だからこそ青少年と「個の深み」のワンダーランドを遊ぶ

からの生涯学習各論である。各論をつらぬいて生きているのは、これからの生涯学習では人のつながりがネットワーク型であること、また、個人の主体性があっても尊重されること、という著者の観点である。ここからは生涯学習はワクワクする、自由な、おもしろいものだというメッセージが伝わってくる。中身は相当重要な問いかけをしているにもかかわらず、教師一年目でも悪戦苦闘している著者の授業風景のコラムなど、遊びが随所にあるのがうれしい。

第一部「現代都市青年と情報」に関しては、中央青少年団体連絡協議会機関誌「なままたら」（八九年二月）において、茨城大学教授菊池龍三郎からつぎのように評論された。

「氏は若者に必要な情報とはどんな情報かという問題について興味ある問題提起を行っている。……そうした新しい情報とチャネルは多分彼らと地域との関係をひっくり返し、地域を彼らにとつての人間形成空間につくり変えるに役立つと思われる。」

同「パソコン・パソコン通信と青年」に関しては、金子書房「青年心理」（九〇年一月）において、大阪大学教授井上俊からつぎのように評論された。

「パソコン通信のネットワークのなかに「自立」と「依存」の統合の可能性を見出し、そこからさらに「知」と「集

団」の新しいあり方、新しい情報文化の可能性を遠望したもので、文章と議論の運びには生彩があり、楽しく読まれてしまう。」

また、第三部第一章「子どもたちの団体活動」そこに秘められている大いなる教育力」では、つぎのような認識のもと「子どもにだって「個の深み」があると主張している。

「団体が子どもたちに伝えたいことをもっているということは、少年団体活動が教育的意義をもつための基本的条件にはなるが、それを子どもたちに説教するだけなら、そんなものは何回繰り返しても本当の教育にはならない。子ども自身が自分でワクワクして、子ども自身が成長をするのである。教育的センスさえあれば、少年団体活動は、そういう「ワクワク」を与えるワンダーランド「不思議の国」の局面を本質的にたくさんもっている。」

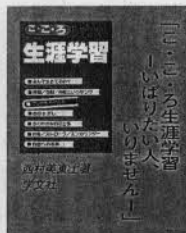
「個の深み」への関心こそが、「個性重視」の合い言葉を超えた、もっと刺激的でしむじみとした出会いをわたしたちが味わうための鍵である」と本書はたびたび繰り返している。

率直に言って、一人ひとりの「個の深み」は現在の組織運営にはむしろ邪魔にさえなりかねない。だが、やつかいだけれどもそれとつきあいていく覚悟を決めなければならない。「個の深み」は、本人の目先の利益には役立つかどうかはわからない。だが、それを支援するのは今後の社会への教育の責任である。」

## 私のすすめる10冊（青少年編）

- ・「現代の青少年—自立とネットワークの技法」柴野昌山／学文社 1854円 03-3715-1501
- ・「青少年の地域参加—生涯学習のまちづくりシリーズ5—」岡本包治他／ぎょうせい 2000円 03-5349-6666
- ・「現代教育の忘れもの—青少年の欠損体験と野外教育の方法—」三浦清一郎他／学文社 1854円 03-3715-1501
- ・「グループ活動と青少年」福岡強／学文社 2987円 03-3715-1501
- ・「生涯学習と学校5日刊」岩淵英之他／エイデル研究所 1800円 03-3234-4641
- ・「がんばれ子供—若者たち—青少年育成のアラカルト」かみむらぶんぞう／日本教育新聞社 2000円 03-3464-3043
- ・「ガイスカウト—20世紀青少年運動の原型—」田中治彦／中公新書 680円 03-3563-1366
- ・「メディア革命と青年」高橋勇悦他／恒星社厚生館 1751円 03-3359-7371
- ・「こ・こ・ろ—生涯学習—いばりたい人、いりません—」西村美東士／学文社 2000円 03-3715-1501
- ・「生涯学習か・く・ろ・ん—主体・情報・迷路を遊ぶ—」西村美東士／学文社 2000円 03-3715-1501

保護や管理ではなく自由への恐怖を与えよ  
若者はその恐怖を受容して楽しみに転化せよ



飲食や入退室がオールフリーの教室で、学生のころをえぐる時間、空間が展開される。そして、教育と学習の双方のやりとりのなかで、幸福追求の人生や学習から逃げ出そうとする私たち現代人の敗北主義があらわにされていく。

いと思うと、本書の袖のこの文章は少々過激で宙に浮いている感もある。だが、日本教育新聞（九四年二月）は次のように評論してくれた。

本書は「生涯学習」がキーワードである。豊かな感性としたたけに続く、著者第ニ弾の生涯学習論である。とにかく、ユニークな本である。「なんで生きてるの」「時間／空間／仲間というサンマ」「フリーチャイルド」「自分さがし」「さわやかな自己主張」「共感／ストローク／エンカウンター」「自由への恐怖」これらは、表紙に踊るキーワードである。豊かな感性としたた

かな自己主張を感じさせる。ところで、

本書の特徴は、自分が担当する大学での授業風景を、学生に課す「出席ペーパー」なるものを通じて赤裸々に紹介していることである。本論とそれとの二重進行が、読み手の興味を一層そそるものとなっている。「個の深まり」としての学習の復

権（体性の回復を、受験学習との対決の中で、自ら実践しようとする著者の姿勢が垣間見られる。本書は、新しき大学教育の実践を、教員と学生の双方向の学習交流として位置づけ、受験体制下で呻吟している現代若者に対して送る「私的メッセージ」という感じが強い。一つの大学教育の変革者と映る。」（『資本膨大

本の最終章こそさらに過激である。そのメッセージは「犯罪者に保護や管理ではなく自由の恐怖を与えよ」とである。学習者の立場からいえば、「みずからその主体性のなさを他へ社会的な保護や管理に至らなく、たせにさせるのではなく、自由の恐怖を交えて、楽しみさらに転化せよ」ということとなる。実際のユースワークや講義、授業では「何でもアリで楽しめよう面白く」が筆者の「何でもない」だが、青少年活動において時に「つまづいてたまたま、指導者自身の思考力などにおいて、この「保護や管理を否定するのではなない」にもっと必要がある」と書くでは説いていているのである。ただし、それを可能に

する条件としては、本書の副題のとおり「いばりたい人、いりません」ということになろう。

この最終章では、コミニケーションを心の底では求めながらも、それによつて備つたきたくないとおののいてる若者たちのこころを受容的に受けとめた内容で、しかしながら、軽やかな無内容の「双方向の一方通行」ともいふべき彼らの「おしやべり症候群」には強く異議を唱えて、つぎのように提唱している。

——こんなストロークも自分の判断で出せるという自由の場面に彼らを引きずりこんでこそ、自分がストロークを本当に求めたなら、それを出さないとによって傷つくことを恐怖している、という自分に気づてゐたろう。……このように誰のせいにもできない状況は、その人の欠点のせいにもできない状況は、その人の責任すべてのストローク発端はその人の責任にすぎないことが、そこでどうするか、ということこそが、本来の現実原則の学習につながる。自由への恐怖を味うことなしには、何も始まらないのである。

指導者が「わたしは世話をして青少年が恐怖しないように守ってあげない」と「何も始まらない」と思い込んでいる限り、青少年が自由を使って自己とは異なる枠組みをもつ他者やものごとと出会う力の獲得は「何も始まらない」というべきたらう。

なお、第二部「ところを聞く態度変化」の学習では、その方法論、実践論が、第三部「主体的学習へのいざない方」では、とくに「学習相談」の傾聴・共感の技術が書かれている。